

## 場所をめぐる構築主義的アプローチの可能性

大平 晃久

### はじめに

1980年代後半以降の人文地理学の新たな潮流における1つの重要なキーワードが文化であり、人文地理学の文化論的転回 cultural turn がしばしば語られてきた。これは人文科学全体を巻き込むポストモダニズムの流れにあり、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアリズムを意識した研究が数多くみられる点で、社会学や歴史学、文化人類学と密接な関連を有している。そしてこの文化論的転回の中では、場所 place を単なる空間の一部ととらえたり、固有の意味が備わった対象として本質主義的にみたりするのではなく、社会的に、そして言語的に構築されたものとしてとらえる視点は広く共有されているといつてよい<sup>(1)</sup>。

本稿ではまず、こうした人文地理学や隣接分野における場所を対象とした研究の中で、構築主義 constructionism<sup>(2)</sup>の視点に立つ研究と呼びうるものにはどのような事例があるかを整理するとともに、こうした場所研究と歴史学における記憶論には共通点が多いことを示す。続いて、主として歴史学や文化人類学の分野における構築主義の理論をめぐる論争を批判的に検討し、場所の経験的研究にどのように構築主義的アプローチが適用可能かを考える。

### I 構築主義的アプローチ

#### (1) 構築主義の定義

構築主義に基づく経験的研究の多くは、人々の性質や社会的な事実として当たり前になされていることがら、実は社会的に、あるいは歴史的に作り出されてきたということ、言説の分析を通じて明らかにする、というスタイルをとる。しかしそのアプローチは幅広く、社会学におけるラベリング (レイベリング)理論、ポスト構造主義、そしてフーコー (Foucault, M.) の歴史研究などさまざまな思想や理論を反映している。構築主義が多様であることは、バー (Burr, V.) によるアプローチの整理からもわかる。すなわちバーは、すべての構築主義のアプローチに共通する特徴は存在せず、「家族的類似性」がみられるのみであると述べ、(1)反本質主義、(2)反実在論、(3)知識の歴史的・文化的拘束性、(4)思考の前提条件としての言語、(5)社会的行為の一形式としての言語、(6)相互行為と社会的実践への注目、(7)過程への注目、という7点を列挙し、これらのうち1つでも当てはまれば構築主義であるとする<sup>(3)</sup>。しかし、これでは社会学的な研究や社会史の全てが構築主義ということになってしまうわけであり、定義としては非常にあいまいであるといわざるをえない。人文地理学についていうなら、新文化地理学の潮流に属する研究をはじめとする、現在の文化地理学や社会地理学の大半の研究が構築主義的研究に含まれることになってし

まう。

これに対して、上野千鶴子はより端的に、「現実と言説によって構築される」<sup>(4)</sup>ことを構築主義の理論的前提として示している。このように、現実あるいは研究対象が言説によって構築されてきたことを重視し、かつ「記述の真偽から記述の適切性へと関心をシフトさせ」<sup>(5)</sup>、反本質主義の視点を明確に示す志向に限って、構築主義と呼ぶべきであろう。そして構築主義は、すべては構築されているという信念を主張するのではない。何らかの対象がどのように構築されているかを、すなわち構築のプロセスを問い直すアプローチ<sup>(6)</sup>として、構築主義は位置づけられなければならないのである。

## (2) 場所をめぐる構築主義的アプローチ

構築主義の経験的研究を、千田有紀は「社会問題をめぐる系譜」、「身体をめぐる系譜」、「物語叙述をめぐる系譜」の3つに分類して示しているが<sup>(7)</sup>、場所の構築を論じる研究はこのうち社会問題と物語の2つの系譜で行われてきたといえる。「社会問題をめぐる系譜」に属する例としては、構築主義の社会問題研究の代表的な論者であるキツセとスペクター (Spector, M.B. and Kitsuse, J.I.) の視座に依拠しながら、ある場所をめぐる社会問題を論じた浅野敏久や杉山和明の研究<sup>(8)</sup>、自然の社会的構築の代表的研究であるエスコバル (Escobar, A.) の研究<sup>(9)</sup>などがある。しかし、構築主義と名乗らないものを含め、場所を扱った構築主義的な事例研究の多くは、「物語叙述をめぐる系譜」に属するといえるものである。

構築主義の「物語叙述をめぐる系譜」に属する研究は、過去や他者をどう叙述の対象とすることができるかを問いつつ、どのような権力関係の中で特定の真実が構築されてきたかに焦点を当てるものといえる。場所の経験的研究でこうしたアプローチをとる例としては、ホブズボウム (Hobsbaum, E.) による「伝統の創出 the invention of tradition」論<sup>(10)</sup>に影響を受けた多くの研究があり、主なもの

として人文地理学の荒山正彦<sup>(11)</sup>、ジェイコブス (Jacobs, J.M.)<sup>(12)</sup>、マケイブ (MacCabe, S.)<sup>(13)</sup>、歴史学の羽賀祥二<sup>(14)</sup>や文化人類学のリネキン (Linnekin, J.)<sup>(15)</sup>らの研究をあげることができる。また、より物語論的な志向を有し、場所を構築する言説の分析を考察の中心に据えた研究もあり、人文地理学の分野では、ナイアガラの滝が死のメタファーで語られてきたこと、そしてそうした文書テキストが景観の創出にも影響を与えてきたことを論じたマクグリービー (McGreevy, P.) による研究<sup>(16)</sup>、ニューイングランドの小さな町にある反乱鎮圧記念碑がどのように設けられ維持されてきたかを論じたピート (Peet, R.) による研究<sup>(17)</sup>、また観光地としての南紀白浜の構築過程を他所イメージとの関連性を軸に描き出した神田孝治の研究<sup>(18)</sup>や、観光化の中で弘法大師ゆかりの聖地が創出されてきたさまを浮き彫りにした森正人の研究<sup>(19)</sup>などがあげられる。これら人文地理学の立場から場所の構築プロセスを論じる研究は、歴史学の分野における研究、例えば横浜の歴史が日本のナショナル・ヒストリーとの相克のなかでいかに構築されてきたかを論じた阿部安成による研究<sup>(20)</sup>などと非常に近い。

このように、場所を扱った構築主義的アプローチの事例研究を整理してみると、場所の構築は主として物語叙述の系譜に属すとともに、人文地理学のほか歴史学、文化人類学が互いに越境しあう中で論じられてきたといえる。構築主義的アプローチの場所研究は他所の表象、そして時間的・空間的な他者の表象を行うのであり、歴史学や文化人類学の分野における他者表象をめぐる激しい方法論上の論争から無縁ではありえず、場所の構築を考察するためには、こうした議論を展開することが不可欠であると考えられる。また、上で見たように、ナイアガラや横浜といった特定の場所の構築を論じることは、特定の記憶の構築を論じることにほかならないということにも気付く。そこで次章においては、他者表象をめぐる議論に先立って、歴史学を中心と

した記憶論との関わりから場所の構築を考察することにしたい。

## II 場所と記憶の結合関係

### (1) 記憶論の広がり

記憶の社会的な把握、そして個人的記憶を超えた集合的記憶という概念の提示は、フランスの社会学者アルヴァックス (Halbwachs, M.) を嚆矢とする<sup>21)</sup>。そして、フジタニ (Fujitani, T.) や大野道邦らも指摘するように<sup>22)</sup>、1980年代の後半以降、記憶は広く関心と呼び、広範囲に用いられる概念となるに至った。

歴史学を中心とした記憶という概念の定着は、ここまで述べた構築主義同様にポストモダニズムの潮流の中に位置づけられるものであり、記憶を主題とした研究は歴史学の刷新、変貌をもたらすものであると評されている<sup>23)</sup>。なぜなら、歴史という概念が本質主義的な過去の唯一の正しい表現という含意を強くもつものに対して、記憶という概念は「過去が表象以前に内在的・決定的意味をもっているのではなく、どのような歴史的現実も、与えられた表象のカテゴリーや意味生成過程による媒介や再構築なしには入手可能ではないこと」<sup>24)</sup>を鮮明にするからであり、北田暁大は記憶論をより端的に「想像の共同体を担保する歴史記述の政治性を告発する」ものと述べる<sup>25)</sup>。記憶という概念は、「過去を認識しようとするあらゆる営み、そしてこの営みの結果得られた過去の認識のあり方」<sup>26)</sup>と定義することができようが、現在の状況から過去の特定の出来事に意味を与える行為、個人あるいは社会集団のアイデンティティと密接に連動した営みとして、記憶は位置づけられるのである<sup>27)</sup>。

記憶という概念をめぐるこうした状況は、場所という概念を取り巻く人文地理学における状況とかなり似かよっている。すなわち、人文主義地理学<sup>28)</sup>における人間存在の根源的価値を有するものとしての場所観に対する批

判の中で、場所は空間や景観とともに社会的構築物であることが広く主張されるに至った。場所は言語・言説によって構築される存在として、あるいは権力関係において把握されなければならないことが主張されているのである。

そして、記憶と場所は緊密な結合関係にあるとあってよい。すでにアルヴァックスも記憶と場所 (アルヴァックスの用語では空間的イメージ) の密接な関係に言及していたし<sup>29)</sup>、サイード (Said, E.D.) やアーリ (Urry, J.) もまた記憶と場所の深い関連を指摘している<sup>30)</sup>。記憶と場所は、木岡伸夫の論じるように、「あらゆる記憶は「場所の記憶」であり、すべての場所は「記憶の場所」である」という関係をなす<sup>31)</sup>。なぜなら、記憶はどこで生じたかという場所との関係を含んで存在する一方で、記憶は場所とのつながりなしには想起されえないといえるからである<sup>32)</sup>。ある場所に関する記憶がその場所の意味を構成すると考えられること<sup>33)</sup>や、想起のためにトポスを意図的に作り出す西洋中世の記憶術<sup>34)</sup>もまた、そのことを裏づけよう。

### (2) 「記憶の場」

記憶と場所の関係を考える上でより重大な論点を含むのが、フランスの歴史家ノラ (Nora, P.) によって提示され、現在の歴史研究に大きな影響を与えつつある「記憶の場 *lieux de mémoire*」という概念である<sup>35)</sup>。ノラは、記憶は「具体的なもの、すなわち空間、動作、イメージ、事物などのなかに根付く」と述べ、「記憶の場」は、物質性、象徴性、機能性において把握されるべきものであり、生きられた記憶が失われた中で共同体が意図的に作り上げ維持するものと説明する。そしてその例として博物館、墓地、モニュメント、教科書、退役軍人会、祭典、記念日、世代などをあげている<sup>36)</sup>。そして「記憶の場」をつきとめるプロジェクトは「われわれの時代の知的な市民のニーズにたいして伝統的史学よりも適合的な、シンボルの歴史学を創りだす

ことに資するであろう」とし、ナショナル・ヒストリーの多声性を孕んだ新しいアプローチであると「記憶の場」研究の意義を示している<sup>67)</sup>。

「記憶の場」に類似した指摘は他にもみられる。すなわち、ファンシーナ (Vansina, J.) はわれわれの記憶を助ける「記憶装置」という概念を示し、物 (object)、景観、音楽をあげている<sup>68)</sup>。また、バーク (Burke, P.) は集合的記憶が伝承されていく5つのメディアとして、口承、文書、イメージ (想像的イメージ、有形的イメージ)、行為、空間を提示している<sup>69)</sup>。これら、「記憶装置」、記憶のメディアという概念は、「記憶の場」を実体的に把握したものといえよう。このほか、ナンシー (Nancy, J.-L.) が論じる「有限な時間の空間化」としての場所も「記憶の場」にほかならない<sup>40)</sup>。ノラのいう「場 lieux」とは、人文地理学で一般に対象とされる場所よりも範囲が広い、意味的な「場」である。しかし、場所を実体的、本質主義的に把握するのではなく、「様々な社会的関係 (取り上げる審級はそれぞれ異なるとはいえ) の交錯する局所的な場」として構築主義的に理解するなら<sup>41)</sup>、人文地理学、あるいは一般にいう場所は「記憶の場」と齟齬をきたすものではない。ただ場所は可視的であり、中程度の空間スケールの「記憶の場」を通常は指すだけの違いといえる。

このように、場所と記憶についてはそれらが互いに不可分であり、場所の構築と記憶の構築は表裏一体であるというばかりではない。ノラの「記憶の場」研究は場所研究の全体を包摂するような視野を有しており、歴史学における記憶をめぐる論点と、場所をめぐる論点はかなりの程度まで一致しているのである。記憶に着目することは、場所の研究において場所の構築に働く力や政治性、あるいは、場所の構築とアイデンティティとの深いつながりを一層強く意識することといえよう。ここからも場所の構築を広く他者の表象をめぐる問題の一環として把握することが要請される。さらには、ノラの「記憶の場」と

いう概念からは、場所が記憶の創出・維持などに果たす役割の検証が経験的研究として求められることも示唆されるのである。

### III 構築主義と本質主義の調停

#### (1) 戦略的本質主義

構築主義的な立場から、場所、そして記憶の構築を把握するためにさまざまな主体の言説を検討することは難題を伴う。歴史学の分野において問題とされてきたのは、構築主義的なアプローチが歴史相対主義につながることである。すなわち、構築主義の立場ではテキスト外の実在は想定しないため、対立する複数の主張をとともに構築された言説とみなすことになる。またそれら対立する複数の言説のうち、どちらがより史実に対応するから正確である、といった判断ができないことにもなる。歴史修正主義をめぐる論争がその代表的なものであり、例えば従軍慰安婦問題をめぐり、元慰安婦側、元慰安婦本人、慰安婦否定派それぞれの言説を、言説としては同等であるとみなし、是非を直接問わない構築主義者に対しては、反倫理的であるといった批判が向けられるとともに、アプローチ自体の有効性が疑問視されてきた。「現実がなくては、どのようにしてフィクションと歴史の区別はつけられるのでしょうか」<sup>42)</sup>という社会史家の疑問によく表れているように、言説を越えた実在という観念を放棄することは、歴史学にとっては受け容れ難い暴論とすらいえるのである。

同じような状況は文化人類学でもみられる。世界各地で少数民族やサバルタン (被抑圧集団) などの政治的弱者が、自分たちの歴史や文化的伝統を強調することによって自らの独自性、主体性をアピールする動きが起こっている。それに対して文化人類学者が構築主義的なアプローチを適用し、彼らの言説を支配側の言説と相対化したり、彼らの特質や伝統として主張されるものが、実は新たに作り上げられてきたものであると暴露したり

する結果を生むことには批判が向けられてきた<sup>43</sup>。

こうした批判や疑問に対して、多くの構築主義者はある意味で現実的な対応をとってきたといえる。すなわち、「政治的正しさ」や「発話のポジション」という、構築主義とは相反する基準を設けることで、政治的弱者の言説を支持することを正当化しようとする論者がいる。こうした方策は、政治的弱者自身による、または外部からそれを支持する論者による、アイデンティティの本質主義的主張を、政治的弱者の政治的地位の向上のための戦略上、必要だと認めるという意味で、文化人類学の分野においては戦略的本質主義 *strategic essentialism* と呼ばれている。同様の主張は歴史学の分野においても行われており<sup>44</sup>、これもあわせて戦略的本質主義と呼びうる。そして、この戦略的本質主義の立場の1つに、リネキン<sup>45</sup>や太田好信<sup>46</sup>らによって提唱された文化の客体化 *objectification* という考え方がある。これは文化の担い手による意図的な文化の利用や改変・創出を、主体的で創造的な文化の形成として積極的に評価するものである。

## (2) 戦略的本質主義への批判

こうした戦略的本質主義に対しては、さまざまな理論的批判が向けられている。以下では、それらのうち文化人類学者の小田亮による批判<sup>47</sup>を取り上げ、考察を加えていくことにしたい。

小田は戦略的本質主義と研究の目的を共有しつつも、ポスト構造主義を徹底する立場から戦略的本質主義を批判し、その乗り越えを試みる。小田の戦略的本質主義批判は2つの柱からなっている。まず1つめの論点は、従来の構築主義の議論では、西欧のオリエンタリズムに代表される植民地化以後の客体化と、ローカルな社会の側で対抗的になされた客体化、また現代のエリートが行う意図的な文化の客体化と、民衆の無意識的な文化の構築、この2組の概念がそれぞれ本来は全く別

であるのに、同じものとみなされていたという点である。小田によれば、植民地化以前（レヴィ＝ストロース (Lévi= Strauss, C.) のいう「真正な社会」)には自己のあり方は首尾一貫したアイデンティティとして全体化されておらず、非一貫性、雑種性を特徴としていた。それに対し、植民地化後の、国民的同一性を典型とする近代のアイデンティティに基づく主体化は、そのような非一貫性、雑種性を否定することによって可能になっている。さらに現代社会においても、エリートの発話・言説と民衆の発話・言説は、表象のスタイルや構造、より具体的にいえば発話・言説のつなぎ方のスタイルや構造において異なっている<sup>48</sup>のであり、エリート、サバルタンといった発話・言説のポジションはひとりひとりに固定的なものと考えたわけにはいかず、固有の場をもたず首尾一貫しないことにこそ民衆の批判性が現れると述べる<sup>49</sup>。

もう1つの論点は、戦略的本質主義が他者を発展段階論のもとにとらえてしまうことである。すなわち、政治的弱者の本質的なアイデンティティ主張は理論的には問題があるが一時的な戦略として認めるという戦略的本質主義の論理には、他者の現在の生活、抵抗への否定が含まれていることを、小田は鋭く指摘するのである。

この2つの批判のうち、まず1つめの論点からみていこう。この論点のうち、場所の構築を考察する立場から特に関心をもつのは現代のエリートと政治的弱者の民衆との間の発話・言説の差異という問題である。民衆の日常の実践の中に抵抗を読み解こうとする議論に対しては、松田素二が指摘するように、いくつか典型的な批判が向けられてきた。そのうち最も重要なものは、何らかの行為が抵抗であるか否かは人類学者・知識人の恣意的な判定のもとにあり、民衆の何らかの行為を抵抗とみなすことは、観察者の政治的立場や願望が反映されたファンタジーにすぎないというものである<sup>50</sup>。小田の議論はこうした批判に応え、戦略的本質主義の立場をとることな

く民衆とエリートの発話・言説をみわけられることを論じたものといえる。なお、小田と同様に、対立する言説のうちで政治的弱者のそれを合理的に区別できるとする議論は、言語哲学の立場から構築主義的歴史学に対して発言を行う野家啓一にもみられる<sup>50</sup>。しかし、野家の議論に対しては高橋哲哉による詳細な反論<sup>51</sup>があるし、小田の議論の方がより精緻なものといえるため、ここでは小田の論考に限定して検討する。

小田の議論は一見すると説得的であり魅力的である。しかし、実際の研究に適用する場合を考えると、決して戦略的本質主義の代替にはなっていないのではという疑問を抱く。すなわち、仮に小田がいうように、非一貫性・雑種性を指標として、民衆とエリートの発話・言説をみわけられるとしよう。だがその結果、可能になるのは、民衆本人の発話・言説のさらに一部分をエリート的な首尾一貫した言説から区分することのみであり、首尾一貫した、意識的に政治的主張にまでなった言説、政治的弱者側に立つ外部からの言説はそもそもこうした検討の対象外になる。つまり小田の議論の適用可能範囲は非常に狭いように考えられるのである。また、そのように民衆の発話・言説をエリートの言説から区分し、提示するだけでは、言説の政治的対立へ研究者が答えを出すという戦略的本質主義の企図を代替することにはならない。小田の議論は戦略的本質主義を否定するものではないとみるべきであろう。

さらに、小田の議論に従うなら、研究者など外部の者が民衆の側に参加することは、戦略的な思考によって真正な社会のブリコラージュを変質させてしまうことになり、好ましくないということになる。もし民衆の抵抗を提示することを越えて研究者が何かを主張するなら、それは戦略的本質主義と呼ばれるだろう<sup>52</sup>。小田の議論では、真正な社会におけるブリコラージュの担い手である民衆と、研究者・エリートの間で区別が厳然と設定されているのであり<sup>53</sup>、その点にも疑問を禁じえ

ない。

次に、2つめの段階論に関する批判を検討したい。小田による戦略的本質主義の段階論がはらむ暴力性の指摘は、説得力があり、十分納得できるものである。しかし同時に指摘しなければならないのは、こうした批判は何も戦略的本質主義に限定されるものではないということである。つまり、何らかの言説が他者の現在を否定しかねないことは、かつてのマルクス主義的發展史観の言説でも、客観主義に基づく「何々語はあと数年で消滅する」や「この事業は失敗する」といったごく一般的な言説においても同様であろう。他者についてのあらゆる言説、とりわけ研究者の言説は、言説を産出する側と他者すなわち描かれる側の力の非対称を背景とした暴力性を帯びうる。上述した小田の議論も研究者と真正な社会における民衆との差異を前提としていて、その問題を回避していない。

「現実と言説によって構築される」という構築主義の理論的前提には、何かを社会的な構築物であると論じる研究自体がまた1つの言説であり、分析の対象となる、という言説のリフレクシヴィティ（再帰性）の問いかけが含意されている。そして、戦略的本質主義の段階論に対する小田の批判は、それらの研究の中にリフレクシヴィティの問いかけの余地を欠くものが存在するという指摘として読むことができるだろう。なぜなら、研究者が自らの言説をリフレクシヴなもの意識することは、他者を否定しかねない言説の特権性と暴力に気付き、それを避けようと努めることにつながり得るからであり、それは研究が段階論に陥ることから逃れるおそらく唯一の方法であると考えられるからである。

このように、戦略的本質主義に対する小田の2つめの批判は、段階論を戦略的本質主義に限定している点で認められるものではないと考える。またそれに加えて、構築主義的研究を進めるためには、本来は構築主義に含意されている言説のリフレクシヴィティをいかに確保するかが重要であることが指摘できる

のである。

### (3) 経験的研究に向けて

構築主義の立場をとり、かつ、政治的弱者の主張を好意的に表象しようとする限り、戦略的本質主義は小田のいうようには否定できない。それでは、構築主義の立場から経験的研究はどのように可能であると考えられるだろうか。

ここまででも確認したように、構築主義は現実の言説による構築を主張する。しかし一方で、言語によるカテゴリー化のプロセス自体が、多様で動的な世界を言語によって切り分け、固定化しようとする、本質主義な対象設定であるといつてよい<sup>60</sup>。日常の生活はまさしくこの本質主義の上に成り立っており、それは日常生活をうまく説明するために発達してきた、と構築主義的な視点からは説明できる、客観主義的な近代科学も同様である。構築主義はこうした日常の常識を覆そうとする理論的志向を有する一方で、日常の常識である本質主義に反することなく経験科学であろうとする実践的志向をもつ。

構築主義におけるこうした理論と実践の乖離を解消しようとする試みの1つが戦略的本質主義であり、もう1つが言説の産出されるコンテキストとして客観的な社会の実態を認める（社会問題研究の分野でいうところの）コンテキスト派構築主義である。この2つのアプローチは、ある集団のアイデンティティや社会の実態を本質主義的に承認することによってより有効な経験的研究を目指す立場だが、言説のみを分析対象とする、厳密に構築主義的な立場（社会問題研究でいう厳格派構築主義）も、ある言説や（何らかの社会の状態を社会問題とみなす）クレーム申し立て活動の存在を疑わない点では、本質主義的な対象設定を完全に回避できているわけではない<sup>60</sup>。構築主義の経験的研究において、本質主義との折衷は避けられないのである。なお、構築主義者にとっては本質主義の代表例である客観主義的研究は全く否定されるものでは

ない。構築主義者にとって客観主義的研究は社会における一群の言説として位置づけられるが、「客観的に正しい」という言明は世界内の言説実践として「(現在のところ)合理的受容可能性が高い」と読み替えることで、構築主義的な言明になる<sup>60</sup>。合理的受容可能性を唯一の基準とみることによって、構築主義内部の戦略的本質主義、コンテキスト派、厳格派は、客観主義など他の方法論とともに、互いに排他的なものではなく並立可能だといえるのである。

そのような方法論の並立の中で、構築主義的研究に問われるのは、経験科学としてどれだけ説得力と意義のある研究結果をアウトプットできるかだといつてよい。前項では小田や野家による発話・言説をコンテキストによらずに区別できるという議論を批判したが、彼らの議論は発話・言説を恣意を避け分類し分析しようとする際のデータ分析技法としてこそ有効であると考えられる。ただし、構築主義的アプローチをとる場合は、単にアウトプットだけではなく、言説のリフレクシヴィティを意識しないわけにはいかず、このことは客観主義との対比における構築主義の特性でもある。つまり構築主義的アプローチにおいては、研究者の言説を再び検討の俎上に載せることによって、経験科学としての成果といつても、それはいったい誰にとっての成果なのかが問わなければならない。歴史学の構築主義において、言説のリフレクシヴィティを意識することは、上野千鶴子の表現を借りれば「歴史家から第三者性の審級を剥奪」し、代わりに「良心的な専門家」とみなすことであるといつてよい<sup>60</sup>。ただし、言説のリフレクシヴィティを意識することは、中河伸俊が指摘するように、「一つ間違えばいわゆる無限後退…の袋小路の入口になりかねない」<sup>60</sup>危うさをもっている。そのような中で、どのような記述や実践が求められるのか、模索を続けていかなければならないのである。

他者表象とそれに抗する自己表象がせめぎあう、カテゴリーとアイデンティティの政治

の中で、「良心的な専門家」として求められる言説に一義的な答えはない。歴史学の構築主義について論じている北田は「たった一人の証人」の発する「《存在の金切り声》」のかけがえのなさについて、「歴史の観察者は、…表象の透明性なるものに懐疑を抱きつつも、それでも《存在の金切り声》を抑圧することのない、そんな文体を模索し続けなければならないのだ」と歴史家に求められる役割を語っている<sup>60</sup>。場所に関する研究をはじめ、他者表象に関わるあらゆる研究分野に、これはそのまま当てはまるのである。

### 結 語

本稿で目的としたのは、場所の経験的研究を構築主義の視点から行うための基礎的な考察であった。まず、研究の多くは物語論の系譜に属し、人文地理学、歴史学、文化人類学の分野から取り組まれていることを示すことによって、場所に関する構築主義的な研究の全体像を提示した。その上で、場所研究と歴史学を中心とした記憶論との関わりの深さを示すとともに、戦略的本質主義批判を再批判することを通じて、構築主義は本質主義との折衷が避けられないこと、その中で客観主義とは異なる経験的研究を生み出す必要があることを論じ、場所の構築主義的アプローチの可能性、方向性を示した。

最後に、構築主義の倫理の問題に触れておきたい。ここまでも述べたように、構築主義的アプローチは事実を明らかにすることについて少なくとも積極的でない。それは事実や真実なるものへの疑い、あるいはそこに働く表象のポリテクスへの関心こそがこのアプローチの大前提にあるからであるが、こうした構築主義の姿勢は反倫理的な姿勢になりかねない、あるいはそうみなされかねないことは、歴史学における歴史修正主義論争にもはっきりと表れている。

しかし、実はそれはまったく逆であり、構築主義という発想は極めて倫理的なものであ

る。そうした構築主義の性格を最も能弁に語るのが、ローティ (Rorty, R.) の「連帯と自由の哲学」であると考えられる。ローティは「反表象主義」に基づいて、人間の生について次のように述べる<sup>61</sup>。

人間は非人間的な力に対して責任を負うという考え方を、プラグマティストは捨てたいのである。われわれが望んでいるのは、「価値の客観性」や「科学の合理性」に関する問いがどれも理解不可能に見えるような文化である。プラグマティストは、自分たちの共同体との連帯を望んでいる。そして、客観性への欲望—すなわち、自分たちの共同体を超えるような実在に触れていたという願望—を、この連帯への願望に置き換えたいと望んでいる。彼らの考えからすれば、科学者がもっている徳目というのは、力よりも説得に信頼を寄せ、同僚の意見を尊重し、新たなデータや考えに関心をもち、あるいはそれらを熱心に求めるという、そういった習慣だけである。

反本質主義という構築主義の発想をつきつめたところにローティはいるのであり、恐らくは構築主義は不十分な「反表象主義」ということになるだろう。そして、構築主義が他者との出会いの中でとるようになった戦略的本質主義は、上の文でローティが描いた科学者の姿勢をとらないのなら、本質主義へと移行せざるをえない性格のものであるといえよう。

構築主義、そしてローティの「反表象主義」のもとでは、あらゆるものにあらかじめ用意された答えなどない。だからこそ、われわれが自らの、そして他者の文化・社会を変える可能性があるのであり、文化や社会を論じる意義があるのだと考える。

### [付記]

本稿は2003年2月に京都大学人間・環境学研究科に提出した博士学位論文の一部を加筆・修正したもの

である。執筆にあたりご指導頂いた金坂清則先生をはじめとする先生方に改めてお礼申し上げます。

## 【注】

- (1) (1)大城直樹「墓地と場所感覚」地理学評論67A、1994、169-182頁。(2)Entrikin, J.N., *The betweenness of place: toward a geography of modernity*, Macmillan, 1991.
- (2) 社会的構築主義や社会構築主義と呼ばれることもあるが、社会学や狭義の社会的現象にこのアプローチが限定されているわけではないため、構築主義という語を用いる。
- (3) バー、V. (田中一彦訳)『社会的構築主義への招待－言説分析とは何か』川島書店、1997、7-12頁(原著1995)。
- (4) 上野千鶴子「構築主義とは何か－あとがきに代えて」(上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房、2001) 279頁。
- (5) 北田暁大「〈構築されざるもの〉の権利をめぐって－歴史的構築主義と実在論」(上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房、2001) 256頁。
- (6) 千田有紀「構築主義の系譜学」(上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房、2001) 15頁。
- (7) 前掲(6) 1-41頁。
- (8) (1)浅野敏久「ローカルな環境運動への地理学的アプローチ－中海干拓問題を手掛かりとして」地理学評論75、2002、443-456頁。(2)杉山和明「社会問題のレトリックからみた「有害」環境の構築と地理的スケール－富山県におけるテレホンクラブ等規制問題から」地理学評論75、2002、644-666頁。
- (9) Escobar, A., 'Constructing nature: elements for a poststructural political ecology' (Peet, R. and Watts, M., *Liberation ecologies*, Routledge, 1996) .
- (10) ホブズボウム、E. (前川啓治訳)「序論－伝統は創り出される」(ホブズボウム、E・レンジャー、T.編、前川啓治・梶原景昭ほか訳『創られた伝統』紀伊国屋書店、1992) 9-28頁(原著1983)。
- (11) 荒山正彦「上高地をめぐるポリテクス－個人的な経験の場から、ある社会を代表する風景へ」地理41-12、1996、59-65頁。
- (12) Jacobs, J.M., 'Cultures of the past and urban transformation: the Spitalfields Market redevelopment in East London' (Anderson, K. and Gale, F. eds., *Inventing places: the study of cultural geography*, Longmann Cheshire, 1992) , pp. 194-211.
- (13) MacCabe, S., 'Contesting home: tourism, memory, and identity in Sackville, New Brunswick', *Canadian Geographer*, 42, 1998, pp. 231-245.
- (14) 羽賀祥二『史蹟論－19世紀日本の地域社会と歴史意識』名古屋大学出版会、1998。
- (15) Linnekin, J., 'Defining tradition: variations on the Hawaiian identity', *American Ethnologist*, 10, 1983, pp.241-252.
- (16) McGreevy, P., 'Reading the texts of Niagara Falls: the metaphor of death' (Barnes, T.J. and Duncan, J.S. eds., *Writing worlds: discourse, text and metaphor in the representation of landscape*, Routledge, 1992) , pp. 50-72.
- (17) Peet, R., 'A sign taken for history: Daniel Shays' memorial in Petersham, Massachusetts', *Annals of the Association of American Geographers*, 86, 1996, pp. 21-43.
- (18) 神田孝治「南紀白浜温泉の形成過程と他所イメージの関係性－近代期における観光空間の生産についての省察」人文地理53、2001、430-451頁。
- (19) 森正人「場所の真正性と神聖性－高知県室戸市の御厨人窟を事例に」地理科学56、2001、252-271頁。
- (20) 阿部安成「横浜歴史という履歴の書法－〈記念すること〉の歴史意識」(阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己編『記憶のかたち－コメモレイションの文化史』柏書房、1999) 25-80頁。
- (21) アルヴァックス、M. (小関藤一郎訳)『集合的記憶』行路社、1989 (原著1968)。
- (22) (1)フジタニ、T. (梅森直之訳)「公共の記憶をめぐる闘争」思想890、1998、2-4頁。(2)大野道邦「記憶の社会学－アルヴァックスの集合的記憶論をめぐる」神戸大学文学部紀要27、2000、165頁。
- (23) (1)岩崎稔「モーリス・アルブヴァックスの『集合的記憶』」未来377、1998、20頁。(2)成田龍一「『公共の記憶』への疑いから歴史の概念を再定義する」論座54、1999、258頁。
- (24) ヨネヤマ・リサ「記憶の弁証法－広島」思想866、1996、5頁。
- (25) 前掲(5)256頁。
- (26) 小関 隆「コメモレイションの文化史のために」(阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己編『記憶のかたち－コメモレイションの文化史』柏書房、1999) 7頁。
- (27) 前掲(26)。
- (28) 1950年代に人文地理学に生じた地理事象の計量モデル化運動に対する反発として、1970年代に台頭した学派。抽象的で等質的な空間ではなく、人間が関わることにより意味づけられ周囲の空間から分節された場所の探求が目指された。
- (29) 前掲(21)163-207頁。
- (30) サイドは記憶と人間的空間(あるいは場所の感

- 覚)という2つの領域が重なりあうことを主張し、アーリもインタビューの中で場所の本性の理解にとって記憶が重要であると述べている。(1) Said, E.D., 'Invention, memory, and place', *Critical Inquiry*, 26, 2000, pp. 175・180 (サイド、E. D. (高橋明史訳)「捏造・記憶・場所(上)」みすず474、2000、15・21頁)。(2) アーリ、J. (江川隆男訳)「場所の消費と社会学的見解」季刊 *iichiko* 72、2001、45頁。
- ③① 木岡伸夫「場所と記憶-規範の生成をめぐって」人間存在論3、1997、137頁。
- ③② 前掲③①141-142頁。
- ③③ 例えばベルク (Berque, A.) の都市の意味に関する議論が参考になる。ベルク、A. (篠田勝英訳)『都市のコスモロジー-日・米・欧都市比較』講談社、1993、12-19頁。
- ③④ 中村雄二郎「新しいトポス論へトピカの遺産をふまえて」(『新・岩波講座哲学7』トポス 空間時間』岩波書店、1985) 301-330頁。
- ③⑤ ノラ、P. (長井伸仁訳)「序論 記憶と歴史のはざまに」(ノラ、P. 編、谷川稔監訳『記憶の場-フランス国民意識の文化=社会史 第1巻 対立』岩波書店、2002)、29-56頁 (原著1984)。
- ③⑥ 前掲③⑤。
- ③⑦ ノラ、P. (谷川稔訳)「「記憶の場 *Lieux de mémoire*」から「記憶の領域 *Realm of Memory*」へ」(ノラ、P. 編、谷川稔監訳『記憶の場-フランス国民意識の文化=社会史 第1巻 対立』岩波書店、2002)、19-20頁 (原著1996)。
- ③⑧ Vansina, J., *Oral tradition as history*, The University of Wisconsin Press, 1985, pp. 44-47.
- ③⑨ Burke, P., *Varieties of cultural history*, Polity Press, 1997, pp. 41-59.
- ④① ナンシー、J.-L. (田尻芳樹訳)「有限な歴史」批評空間2、1991、117-134頁 (原著1990)。
- ④② 前掲④① (1)171頁。
- ④③ ギンズブルク、C. (上村忠男訳)「ジャスト・ワン・ウィットネス」(フリードランダー、S. 編、上村忠男・小沢弘明・岩崎 稔訳『アウシュヴィッツと表象の限界』未来社、1994) 98頁 (原著1992)。
- ④④ 代表的なものとして、サイド (Said, E.) によるスコット (Scott, J.C.) のへの批判があげられる。サイド、E. (姜麦瑞訳)「被植民者たちを表象=代弁すること-人類学の対話者」現代思想26-7、1998、72-91頁 (原著1989)。
- ④⑤ 例えば次の2書に収められた諸論考。(1)フリードランダー、S. 編、上村忠男・小沢弘明・岩崎稔訳『アウシュヴィッツと表象の限界』未来社、1994 (原著1992)。(2) 鶴飼哲・高橋哲哉編『「ショアー」の衝撃』未来社、1995。
- ④⑥ Linnekin, J., 'On the theory and politics of cultural construction in the Pacific', *Oceania*, 62, 1992, pp.249-263.
- ④⑦ 太田好信『トランスポジションの思想-文化人類学の再想像』世界思想社、1998。
- ④⑧ 小田亮「文化の本質主義と構築主義を越えて」日本常民文化紀要20、1999、111-173頁。
- ④⑨ ここでの議論はレヴィ=ストロースによる(「技師の思考」に対する)「プリコラージュ」の概念、ド・セルトー (de Certeau, M.) による(「戦略」に対する)「戦術」の概念が下敷になっている。
- ④⑩ 前掲④⑧154-155頁。
- ④⑪ 松田素二『抵抗する都市-現代人類学の射程』岩波書店、1999、11-12頁。なお、松田自身は戦略の本質主義に類する戦略的リアリズム、暫定的啓蒙主義の立場を明らかにしている。同251-255頁。
- ④⑫ 野家啓一「歴史のナラトロジー」(『(岩波新・哲学講義8) 歴史と終末論』岩波書店、1998) 1-76頁。野家は「歴史の物語り論」が本来もっている「批判的機能」という背景の意図を言説の一部としてとらえることで、対立する言説に合理的な区別を与えようとしている。
- ④⑬ 高橋哲哉『歴史/修正主義』岩波書店、2001。
- ④⑭ 小田は別の論文でイグナティエフ (Ignatieff, M.) の論考を引きつつ、民族対立の中のセルビア人民兵とクロアチア人民兵が、民族アイデンティティについて首尾一貫しない発言を行っていることに注目している。そして、彼らのそのようなプリコラージュについて「いまは敵となっている隣人との和解や、固定された民族的アイデンティティへの疑念へ向かう、唯一の希望なのではないだろうか」と述べるが、こうした見方は、抑制されているとはいえ、戦略の本質主義的な見方と差がないように考えられる。小田亮「越境から、境界の再領土化へ-生活の場での〈顔〉のみえる想像」(杉島敬志編『人類学的実践の再構築-ポストコロニアル転回以後』世界思想社、2001) 297-300頁。
- ④⑮ 「文化の客体化」論者の太田は、現地エリートや人類学者の実践や主張を「普通の人たち」の実践や主張から区別し、排斥することに対して疑問を提示している。太田好信・清水昭俊・富山一郎「鼎談 文化人類学の可能性」現代思想24-3、1998、47頁。
- ④⑯ カテゴリー化については認知言語学の論考や拙稿を参照。(1)河上誓作編『認知言語学の基礎』研究社出版、1996。(2)拙稿「カテゴリー化の能力と地名」地理学評論75、2002、121-138頁。(3)拙稿「信念・知識体系の一環としての地名-中島氏と成瀬氏の批判に答えて」地理学評論76、2003、180-183頁。

- 56) こうした社会問題の構築主義的研究の理論的動向については次を参照。中河伸俊『社会問題の社会学－構築主義アプローチの新展開』世界思想社、1999。
- 57) 解釈学的な言語哲学の考え方を参照。富田恭彦『クワインと現代アメリカ哲学』世界思想社、1994。58) 前掲(4) 297頁。

- 59) 前掲56) 282頁。
- 60) 前掲(5) 269-270頁。
- 61) ローティ、R. (富田恭彦訳)「連帯としての科学」(ローティ、R. 富田恭彦訳『連帯と自由の哲学－二元論の幻想を超えて』岩波書店、1988) 17頁 (原著1987)。